

まなこ

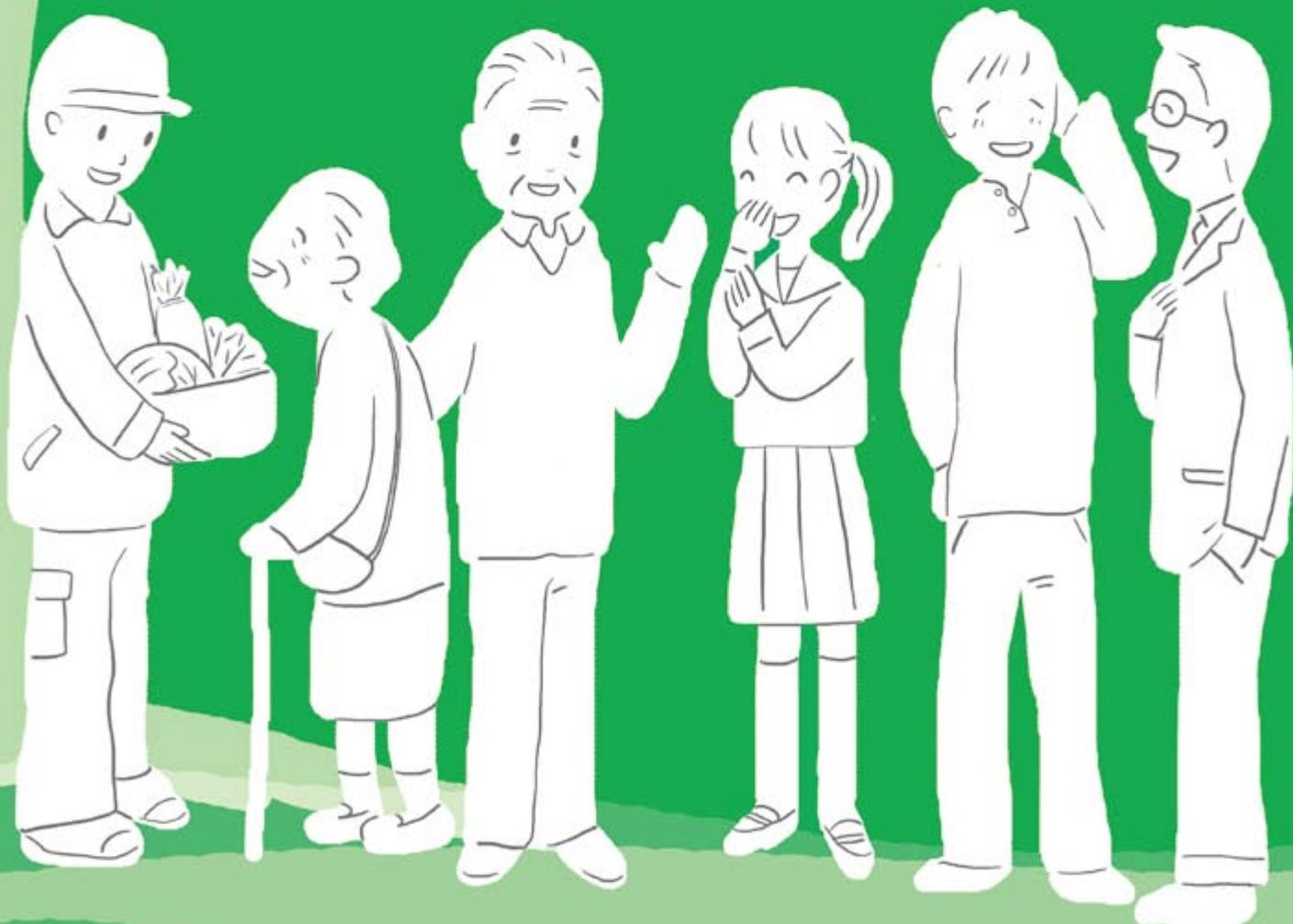
manako.

なこ



再生 とともに歩む

特集 つながる気持ち
生まれる力



東日本大震災から1年、世の中が大きく変わったあの日を決して忘れることはできません。広がる支援の輪を絶やさず、みんなで支えあい助けあう社会を目指し、前に向かって進みましょう！

特集

つながる気持ち 生まれる力

人と人とのつながり、地域のつながり、離れていてもつながる気持ちがあれば、きっと新しい力が生まれてきます。この震災を機に新たに活動を始めたり、これからのまちづくりに向けて自ら考え始めた人も多いようです。今まで以上によりよい社会にしていくなために、一緒に考えましょう。

これからのまちづくりに必要なのは、新しいつながりの場

武蔵野地域自由大学の履修科目の一つである「街づくり未来塾」。

栗田充治さん
みちはる



亜細亜大学国際関係学部教授
教諭課程科目「ボランティア論」災害救援活動論などを担当。ボランティアセンター武蔵野運営委員会副委員長、武蔵野市NPO・市民活動ネットワーク理事長など

「街づくり未来塾」のコーディネーターでもある栗田充治先生に、これからの武蔵野市の地域交流のあり方についてお話を伺いました。

東日本大震災という大きな災害を経験し、多くの市民の方々がこれからのまちづくり、地域交流のあり方などについて、何かしら感じたり考えたりしたのではないのでしょうか。それはまさにホットな課題だと思えます。

まちづくりなんて言われると、ところどころの難しい問題のように思いますが、自分たちの地域やまちのなかでどういうふうに住みながら生活するのか、生活を守るのか、そのような感覚としてすでに表れてきているように思っています。例えば、今度の震災による原発事故における問題では、今まではそれこそその安全性等について専門家や企業に任せきりになり、それに寄りかかってきたようなところ

ころがあります。しかし、市民が自分で放射能カウンタを持ち数値を計りだしたというのは、やはりその問題を人に預けないで自ら動いていこうという市民の思いの表れだと感じます。そういう意味で、少し政治へのスタンスというか、町を治める、地域を治める、国を治めるというところへの関わり方の潮目が変わりつつある、そういう印象を受けています。私は武蔵野市NPO・市民活動ネットワークの代表として、昨年オープンした「武蔵野プレス」の専門家会議にもかわりました。開館前には、市の呼びかけで、プレイスの市民活動フロアがどんな場所なら使い勝手がいいのかということを行政と市民が話し合ったために、市民

「取材文 関口直子」

野菜づくりが人と人をつなぐ！

むさしの農業ふれあい村の村長として日々精力的に活動している齋藤瑞枝さんに、その活動の内容についてお話を伺いました。

学生である私たちに、今、できること

成蹊大学 学生ボランティア本部Uni.(ユニ)さんにお話を伺いました。

文学部2年 坂田実穂さん 経済学部3年 亀川洋一さん
法学部1年 小島嵩弘さん



齋藤瑞枝さん

NPO法人武蔵野農業ふれあい村理事長 千葉大学大学院自然科学研究科修士 農学修士 緑化工学会会員 環境情報センター会員

むさしの農業ふれあい村
http://www.agrifureai.com/

毎年春に約80区画を公募する農業塾では、野菜づくりを指導するプロ

公園でつくる野菜が本場に安全か不安で活動をやめてしまった方もいました。しかし、被災地では多くの人がもつと過酷な状況のなかで必死に通常の生活を取り戻そうと努力されています。だからこそ、私たちは風評に振り回されず、粛々と通常の活動を続けていきたいと考えています。そして私たちの活動を通じて役立てることがあれば積極的に協力していく、被災地とはそうした淡々とした関係を長く維持することが大事なのではないかと感じています。

「取材文 関口直子」

むさしの農業ふれあい村は「農業ふれあい公園」(関前5-19)を中心に、市民が楽しみながら農業に触れ、耕作し、学ぶことによって農業への理解を深めること、そして農業公園として武蔵野の農風景を未来に伝えることを目的として活動しています。

認めるようにしているのですが、公園でつくる野菜が本場に安全か不安で活動をやめてしまった方もいました。しかし、被災地では多くの人がもつと過酷な状況のなかで必死に通常の生活を取り戻そうと努力されています。だからこそ、私たちは風評に振り回されず、粛々と通常の活動を続けていきたいと考えています。そして私たちの活動を通じて役立てることがあれば積極的に協力していく、被災地とはそうした淡々とした関係を長く維持することが大事なのではないかと感じています。

これまで私たちの活動は、4期にわたる多くの塾生の方々の野菜づくりへの熱意と厚意でやってくることでできましたが、今後はその気持ちにこたえるためにも、この活動が持続可能なものになるよう尽力して

学生ボランティア本部Uni. (ユニ)は、約3年前に結成された大学公認のボランティア団体です。構成員それぞれの興味や関心を大切に、自発的な意識で現場に赴き、そこでしか味わえない経験を通じて仲間と共に成長していきたいという思いでスタートしました。環境チーム(地域のゴミ拾いなど市民の身近なことに貢献)、教育チーム(市内コミセンの小学生放課後対策のボランティアなど)、国際チーム(発展途上国など国際問題に目を向けた活動)、地域チーム(お祭りなど、地域の活性化や問題解決に貢献)、そして福祉チーム(市内の障がい者や高齢者へ向けたボランティア)と5つのチームに分かれ約160人の学生が活動しています。「自分を楽しんでいること、人の役に立っていること、それがいい」ともうれい「3人は話します。」「Uni.のいいところは、5つある

宮城県石巻地区のボランティア活動に参加したUni.のメンバー

「震災ボランティアの経験をまず、は母の学校の学生へ、そして市民のみなさんにも伝えていきたい」「学生だけでやっていたら出せないような人と出会えるボランティア。活動を通じて人の輪を広げていきたいな」と3人。楽しみながら、そして学びながら活動するこの団体から、元気をもらいました。

「取材文 小林美菜」

やりたいことを発信したい！ 女性力を活かした発信型コミュニティ

武蔵野市内や近隣在住の女性と社会的活動をつなぐ活動をしている『吉ママネット』。女性力を活かしたイベント等を企画していますが、震災後は活動に対する意識が変わったと言います。代表者の宮島さんに、その理由と想いを語っていただきました。



宮島佳代子さん

(有)クラルテ代表取締役
出版、編集、イベント・講演企画など幅広く手がける。社会的活動や仕事をつなぐ応援活動『吉ママネット』を主宰。産業カウンセラーとして、各種相談にも応じている

☆あなたも参加しませんか！？
人と社会的活動をつなげる講座を開催しています！
女性起業家ゼミ、情報発信セミナー、人と感動をつなぐイベント等を企画しています。『吉ママネット』のメンバーも随時募集中。
詳細は <http://www.kichimom.com> まで。

女性と社会をつなぐきっかけづくりのために、これまでも様々な活動をしてきましたが、震災を境に活動の流れが変わってきたのを感じています。震災後は本当に様々な感情が湧いてきました。その中でも特に強く思ったのは「今まで本当にやりたいことをやってきただろうか」ということです。そんな時、福島出身の詩人、和合亮一さんの詩に出会い、初めて聞いた「現地の生の声」に心が動きました。「和合さんの詩を多くの人に伝えたい」と早速、ご本人に連絡を取り、吉祥寺でチャリティーコンサートを開催することになりました。

「次は別のこともしたい」と様々なため、「互いに無理せず、共感できる部分や自分の得意分野でかかわれる自然体の活動」を目指す意識も生まれました。つながるだけでなく、互いをサポートし、盛りたてていくという方向性が改めて見えてきたと思います。今後はコミュニティビジネスを中心とした活動をしていく予定です。社会とのつながりを求める女性に向けた講座やイベントを開催し、参加者がやりたい活動にか

わっていきけるようなサポートをしていきたいですね。主婦の仕事は立派なキャリアなので、その女性力を活かす場づくり、例えば、お店を新しく出す際に主婦の意見を提案したり、商品開発のアイデアなどを発信する場なども作ってきたいと思っています。私たちが元気で経済活動をしていくことが日本再生の力になっていくと思います。そのためにも女性力を社会に発信していきたいと思っています。 [取材・文 詩水淳子]

おひとり様も大歓迎 ふらっと入れるお気軽「コミュニティカフェ」



吉祥寺育ちの店長・竹内聖織(まさおり)さん
Café FRIENDS
(open 11am~23pm 毎週月曜定休)
<http://ameblo.jp/cafefriends/>

お客さん同士の交流を大切に、心温まるカフェを目指しているカフェフレンドズ。入り口には「1人でもどうぞ」の看板。店長の竹内さんは、大学時代に警察官を目指して勉強していたという。犯罪の加害者・被害者の双方に見られる、社会からの孤立に気づいたとき、何とかできないものか。と他店で1年間修行の後、地元の知り合いがさらに増えた。何よりも嬉しいのは、ここで知り合ったお客さん同士が仲良くなり、どこかへ出かけたという話を聞くこと。ギター教室や手品教室、オセロクラブを月に1〜2回開催するなど、勉強会や企画イベントなど「場所作り」にも積極的だ。また「農業や体のことも考えたい」と国産野菜にこだわりの「飲むサラダ」と名付けたミックス・ジュースや「讀岐うどんバスタ」などメニューもとてもユニークだ。

吉祥寺駅からサンロードをぬけた住宅街にある静かでゆったりとした空間は、ひとりて読書するもよし、居合わせたお隣同士でおしゃべりするもよし、テラスならベットもOK。「おしゃべりがしたい方はもちろん、こんなこと得意です」とイベントを企画してくださる方も大歓迎です！お気軽にお声かけください」と竹内さん。地域住民にやさしい「コミュニティカフェ」だ。 [取材・文 藤原理和]

市民参加の活動で、地域の質をあげよう



若草色の横断幕「ののブレ」が目印
プレーパークむさしの(境3-20)
<http://p-musashino.org/index.html>

NPO法人プレーパークむさしの、通称「ののブレ」は、武蔵境駅から北へ約10分のところにある、お父さん視点のある「みんなで作るみんなの遊び場」だ。ののブレ代表理事の池田泰さんは、パークで遊ぶ親子を見ながら「あれやこれや注意せず、遠くで見守ることも大切」とつぶやく。

震災の日、池田さんは武蔵境に向かう中央線の車中にいた。家族と職場と「ののブレ」の対応に追われ、その時、自分には、3つの気にするものがあることを改めて実感したという。この経験から、今年は恒例の水イベント、秋まつりに加え、防災イベントもおこなう予定。「ここには常に人がいるので、近隣の人も「ここはこういうものだ」と、今では何かあったときの心のよりどころになっているようだ」と池田さん。「自分の住んでいる地域の質をよ

りも大切」という熱い信念で活動している。この活動をはじめ6年目、知り合いがたくさん増えた。最近では近所に買い物に行っても、知り合いに挨拶したり、顔見知りにならなくなったり、ひと休みする間もない...と言いなながらも、「定年後の孤独感や虚無感などの心配は自分にはないだろう」と微笑む。しかし、このつながりこそ、これからの地域に必要なのだと感じている。 [取材・文 藤原理和]

健やかに暮せる未来づくりを目指す

『まちエネナソプロジェクト』

震災をきっかけに、衣食住に関わる生産・消費の新しい仕組みづくりと、それを使った暮らしを提案する『まちエネナソプロジェクト』を立ち上げた安田さん。これからの時代に必要な『地営業』とはどんなものかを伺いました。

原発事故が起こった時は、事の重大さと「電力会社を選べない現実」にがく然としました。そこで、「小規模でいいから、地域の電力会社を作ろう」と思い立ち、その構想をまとめた『まちエネナソプロジェクト』の企画書を作り、いろんな人に見せて回りました。

ところが、「電力会社なんてできるわけがない」と反応する人がほとんど。「この温度差はなんだろう？」と自問したところ、自分が既に鎌仲ひとみ監督の映画『ミツバチの羽音と地球の回転』を観て、「スウエーデンが20年前の政策転換によって自然エネルギーの活用を進めていること」を知っていたから、エネルギーシフトに肯定的なことに気づきました。

そこで、昨年7月1日に武蔵野公会堂でこの映画の自主上映会を開催し、この時は約700名の方に「新しいエネルギー観」に触れていたことができました。また、この上映会では地域の知人、友人が実行委員として活躍。「場ときっかけがあれば、人は大きな力を発揮できる」



安田知代さん

三鷹市在住 編集者
企業の環境報告書やCSR報告書の作成、本の編集、執筆を手がける『地営業』を営む。出版物に『井の頭公園まるごとガイドブック』『懐かしい吉祥寺 昭和29・40年』(共にぶんしん出版)がある

☆あなたも参加しませんか！？
「++セッション」では参加する人たちの「エネルギー」と「智恵」と「勇気」を++(たすたす)して、未来をつくる仕事「地営業」を生み出しています。
詳細は <http://www.tassetasse.jp> まで。

ことにも感動し、そういった仕組みづくりもしたいと思いました。

その後、同じ志を持った新たな仲間とスタートさせたのが「++セッション」です。このセッションは「エネルギー＝電力」という固定概念から抜けだし、「生態系の調和のもとに人が健やかに働き暮らせる仕組みを実現するビジネス」を生み出すためのワークショップとなっています。

この活動を通して私たちが広めているのは、地と人をつなぐ『地営業』

です。『地営業』とは「短期的な収益のみに価値を置かず、40年後の未来にも続いていく地域に適した生業」のこと。こういった活動をすでに実践している先人たちをゲストに迎え、参加者と一緒に現在のマイナ

ス状況をプラスに変えていくビジネスを模索しています。これまでの活動でいくつかのプランが実際に動き始めました。たくさんの方々と連携して『地営業』を広め、安心して暮らせる未来につなげていきたいと思っています。 [取材・文 詩水淳子]

良質な絵本の読み聞かせで「楽しい子育てのひととき」を

「絵本の持つ素晴らしさ」はわかるが、具体的にはどんな絵本をどんなふうに読んであげたらいいのか...。いざ読み聞かせとなると疑問はいくつもある。そんな漠然とした疑問を一緒に解決してあげたらと「武蔵野子どもと絵本プロジェクト」を立ち上げた西本咲子さん。自らも絵本講師の資格を持つワーキングマザーだ。「絵本や読み聞かせに関するイベントは平日に集中しており、父親母親目線で楽しめるものがない...」と週末に絵本講座や絵本サロンを開催している。

講座では絵本の専門家を招き、例えば「ももたろう」など同じ題材でも多数出版されている中から、良質な1冊をどのように選ぶか、などの実践的なお話が聞ける。講座終了後、思わず本屋さんに行きたくなるほどの内容だ。一方、絵本サロンでは、毎回テーマを決めて絵本を持ち寄り、その絵本へのこだわりや日頃の読み



左から絵本講師の岡部雅子さん、森ゆり子先生(「絵本で子育て」センター理事長)、西本咲子さん、水藤順子さん
武蔵野子どもと絵本プロジェクト
<http://ameblo.jp/musashino-kodomo-ehon/>

聞かせのことなど意見交換をしながら「また、がんばろう」と育児に前向きになれるようなワークショップを目指す。読み聞かせの輪が市民活動として広がっていったら嬉しいと語る。良質な絵本を心をこめて読むことは、子どもにとって最高の財産になるだろうと感じた。 [取材・文 藤原理和]

INFORMATION

市民協働推進課 男女共同参画担当から

●武蔵野市男女共同参画推進市民会議(第3期)について

昨年9月から計6回の会議を開催し、市の第二次男女共同参画計画の推進状況などを検討していただきました。今回は、第2期で話し合わなかった心と体の健康支援、男性の育児・介護・地域参加、メディアリテラシー、条例の他、男女共同参画の視点からの防災対策などをテーマとしました。検討結果をまとめ、4月に意見書を市長へ提出していただきます。

●平成24年度男女共同参画推進団体の登録・更新について

女性の社会進出の支援など、男女共同参画の推進を目指す活動をしている団体を「男女共同参画推進団体」として登録しています。

対象は、男女共同参画社会の実現に向けた活動を主たる目的として継続的かつ計画的に活動する団体で、登録の要件としては、①営利を目的とした活動又は営利活動を援助する行為、特定の政党、宗教又は教団を支援する行為を行わない団体である②団体の構成人員が5人以上で、原則として構成員の3分の2以上が武蔵野市内に在住している、などがあります。

登録団体は、男女共同参画社会実現のための研究会や講演会の開催などの活動補助金の交付申請、むさしのヒューマン・ネットワークセンターの印刷機使用料の半額免除などができます。

現在登録中の団体で、平成24年度の登録更新または登録取消を希望される場合は、市から送付している申請書を4月30日までに提出してください。期日までに登録申請を行なった団体は、団体名簿に掲載し、一般に公開します。

*なお、新規登録は随時受け付けております。

企画政策室 市民協働推進課 男女共同参画担当 TEL: 0422(60)1869 FAX: 0422(51)2000 URL: <http://www.city.musashino.lg.jp>

●市民とつくる男女共同参画情報誌『まなこ』レポーター募集

家庭、地域、社会、労働の場などで男性・女性が共に抱えている問題について関心がある方、活動している方で『まなこ』のレポーターをやっていただけの方(ボランティア)を募集します。

主な活動: ①年4回程度のレポーター会議出席(3か月以上就学前のお子さんの保育あり) ②各号のテーマに関する意見、情報などのアンケートの提出 ③取材協力、記事の提供など。

募集内容: 市内在住・在勤・在学の方。10名程度(超えた場合は調整あり)。任期は1年間(平成25年3月31日まで)。

申込み: はがき・FAXで4月16日(月)までに。①住所 ②氏名 ③電話番号 ④私の興味ある『まなこ』のテーマ(100字程度) ⑤(あれば)活動団体を記入し、市民協働推進課男女共同参画担当まで。

●DVをテーマに男女共同参画職員研修を実施しました。

2月1日(水)、男女共同参画研修を実施し、各課から計82名の職員が参加しました。今年度はお茶の水女子大学名誉教授の戒能江さんを講師にお迎えし、「DVとは?~自治体職員に必要な理解と適切な被害者支援のために」と題してご講演をいただきました。DVの実態や特質・影響、DV法のしくみ、自治体職員に求められることなど、体系的で実践的な内容の研修となりました。

●「ワーク・ライフ・バランス講演会」を開催しました。

3月3日(土)、市役所811会議室において、(株)東レ経営研究所の渥美由喜さん、料理研究家のコウケンテツさんを講師にお迎えし、「ワーキングパパが語る! 家族の絆を深める子育て」と題し、ワーク・ライフ・バランス講演会を開催しました。(来場者101名)

講師お二人の実体験を交えたお話から、子育てと仕事を両立させるための様々なヒントを聞くことができ、日々の生活そして家族について改めて考えるきっかけとなる講演会となりました。

column 心のケア VOL.3

もっと楽にいきませんか?

現代の人は「やりたくない行動」に時間を費やすことが多くあります。それは一体なぜでしょうか? 自分を好きになることをサポートする人気心理カウンセラーの心屋さんに「心が楽になるヒント」を教えてくださいました。

日常生活の中には、恐れや不安から取られている行動がたくさんあります。例えば、「迷惑をかけない」「遅刻をしない」「メールの返信は早くする」などです。服装、しきたり、礼儀なども同じように感じられるケースが多いようです。人がなぜ、そんな思いで行動を起こすのかというと、それは心の根底で「自分をわかってもらえない」という恐怖を持っているからです。

この恐怖は主に子どもの頃の親との関係の中で生まれてきます。多くの子どもは親による「しつけ」の中で制限をかけられて育つので、ほとんどの子どもが「自分の期待に応えてもらえなかった経験」を持っています。その経験により、子どもは無条件に人を信じる事ができなくなり、「自分をわかってもらえずにはそのための行動が必要だ」と思うようになっていきます。「しないといけない」という思いは、「それをしないと自分をわかってもらえない」という恐れ「本当の自分を知ってほしい、嫌われたくない、傷つきたくない」という心の現われなのです。

大人になってもこのサイクルから抜け出せずに、「自分をわかってもらうための行動」を取っている人を多くみかけます。でも、自分の行動を100%相手にわかってもらえないことなどそうはないので、それを続けていると、やがて心は疲れてしまいます。



こころや 仁のすけ 心屋仁之助さん

心理カウンセラー 心理療法やNLPを採り入れた独自のカウンセリング、セミナー、執筆活動を行っている。最新著書は「心が凹んだときに読む本」(王様文庫)、他多数の著書がある。2万人の読者を持つメールマガジンやアメブロ <http://ameblo.jp/kokoro-ya/> が好評

また、礼儀や作法、しきたりなどは、もとは「おもてなしの心」「やさしさ」などから生まれています。それを表から見て「しないといけない」と思った瞬間に恐れが生じます。「したい」と思うか、義務と義務によって、行動の意味は大きく変わってくるので、その違いを理解し、意識の視点を変えてみたり、できるだけ「したい」と思う行動を取るようになっていくと、心はより軽くなつていきます。

自分をわかってもらいたいのなら、自分の気持ちを相手に伝えるのが一番良い方法です。でも、慣れない人にとって、これはなかなか難しいことです。そんな時は、まずは「〇〇して欲しい」という素直な思いを口にしてみましょう。もし、伝えるのが怖い時は、先に「嫌われたっていいや、損したっていいや」と小さく口にしてみてください。これは心を落ちつける魔法の言葉です。ぜひ、試してみてくださいね。

【取材・文 詩水淳子】

もしDVにあっているなら... 相談窓口をご案内します

●武蔵野市役所 母子(ひとり親)・女性相談 0422-60-1850 (祝日・年末年始を除く月~金曜 9:00~17:00)

●警視庁総合相談センター 03-3501-0110 (祝日・年末年始を除く月~金曜 8:30~17:15)

【配偶者暴力相談支援センター】

●東京ウィメンズプラザ 03-5467-2455 (年末年始を除く毎日 9:00~21:00)

●東京都女性相談センター多摩支所 042-522-4232 (祝日・年末年始を除く月~金曜 9:00~16:00)

●東京都女性相談センター 03-5261-3110 (祝日・年末年始を除く月~金曜 9:00~20:00)

夜間・緊急の場合

●警察(事件発生時) 110番

●東京都女性相談センター 03-5261-3911 (夜間・休日のみ)

●武蔵野市役所 女性総合相談 専門の女性相談員が対応します。予約制 第2木・第4火(相談時間50分) 予約専用 0422-60-1921

震災の日、私は帰宅難民となつたが、すぐに同行の仲間ができて、助け合いながら帰った。放射能で水が問題になった時は、様々な人に世話になった。それ以来、少しのきつかけさえあれば、人はつながれるのだと感じている。日常的にそのつながりを持つために、心豊かな社会を実現するためにも、そろそろ各人が人任せにせず、自分の声を上げる時期に来ているのではないかと。震災を経た今こそ、古い社会の仕組みを変えられる気がする。

社会を変えるチャンス 馬場美江 ●境南町

震災の日、私は帰宅難民となつたが、すぐに同行の仲間ができて、助け合いながら帰った。放射能で水が問題になった時は、様々な人に世話になった。それ以来、少しのきつかけさえあれば、人はつながれるのだと感じている。日常的にそのつながりを持つために、心豊かな社会を実現するためにも、そろそろ各人が人任せにせず、自分の声を上げる時期に来ているのではないかと。震災を経た今こそ、古い社会の仕組みを変えられる気がする。



生きていく力 近藤和恵 ●御殿山

歳を重ねると、その言葉の意味を真に理解したと思ふ瞬間がある。もう頑張れないと言つた人の孤独は「人は一人では生きられない」ことを実感させてくれた。もし魔法が使えて、欲しい物はすべて手に入るとしても、その代償が一人きりで生きていくことなら、私はそれを望まない。まして前向きに生きていくことなどは思えない。たった一人でも私の存在を心にかけてくれる人がいてこそ、私の生きていく力は湧き上がってくるような気がする。



震災が自分に向き合つきっかけに 井上紀子 ●関前

3・11以降、故郷に住む夫と私の両親や姉妹と近況を伝えあう電話やメールが増えました。お正月には家族で帰省し、みんなで新年を迎えられる事にこれまでとは違う幸せを感じました。震災はあたり前だった日常が永遠ではないという事、家族や故郷とのつながりが自分の心の支えになっていることを教えてくれました。日々の忙しさに見失いがちですが、一呼吸おいて今この一瞬に感謝し、毎日を大切に過ごしたいと思ふます。



「まなこ」レポーターの200字コラム つながる気持ちや生まれる力について思ふこと

数字で見る男女共同参画 Vol. 3

Column

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」 男性の反対が初めて賛成を上回った 平成21年時の反対の割合です。

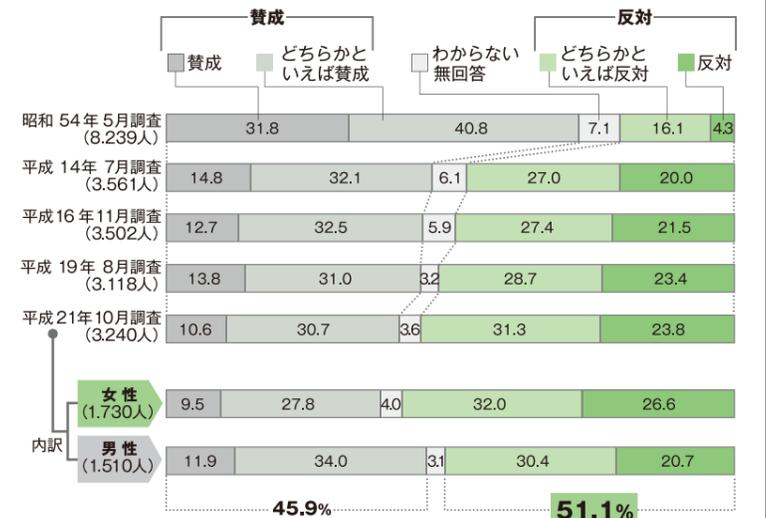
上図は「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という固定的性別役割分担意識の経年変化を調べたものです。昭和54年の調査では賛成の割合が7割を超えていましたが、平成14年の調査で初めて反対が賛成を上回りました。また、平成19年の調査では反対が5割を超えたことを示しています。また、男女別にみると、男性は平成21年の調査で初めて51.1%と反対が賛成を上回り、同年の女性は男性より約8%反対する人が多いことがわかります。

平成11年に「男女共同参画社会基本法」が公布・施行されたことを考えれば、平成14年に初めて固定的性別役割分担意識の賛成と反対の割合が逆転したことは比較的早い展開と言えるでしょう。しかし、実際に男性の反対が初めて賛成を上回ったのは平成21年であり、昭和54年の調査から実に30年の時を経てようやくその結果を得たとなると、意識の改革は、むしろ遅々として進まなかったというほうが適切なのかもしれません。

ただ、この結果から一つ言えるのは、現代社会において男性も女性もやっと同じ目線で家庭生活を営む意識が芽生えているということです。数字だけではなく実態を伴った「男女ともに仕事も家事・育児もする社会」を目指したいものですね。 [文 関口直子]

これって何の数字?

51.1%



参考: 内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」(平成21年10月)より作成

『まなこ』は文字通り「^{まなこ}眼」。人やまちや文化や地球を、男女共同参画の視点＝「まなこ」で見たい！という思いで名付けられました。1991年創刊以来、市民が企画・編集にかかわっています。

平成23年度『まなこ』第3回レポーター会議

83号「こころとからだの健康」を読んで

●今の自分にとって知りたい内容で、興味深く楽しく読めた。
●学校力ウンゼラーについては興味はあったので今回具体的に知れてよかった。
●ウォーキングの記事は、普段よく行く身近な場所だし、イラストもあってよかった。(40代・女性)

●いろいろな方面から山にアタックしているような広がりがあり、読みごたえがあった。
●編集委員さんの「まなこ」ができるまでの試行錯誤について載せたらよい。(60代・女性)

●ストレスで眠れないことがあったが、具体的な対処法をわかりやすく示してくれていて、とてもよかった。
●傾聴の記事を読んで、これから家族の話をよく聞いてみようと思った。
●コラムの「30分」の記事は夫に読んでもらいたい。(40代・女性)

●84号に向けてのご意見もいただきました！



12月15日(木)
10:00~12:00
市役所812会議室にて

BOOKS

むさしのヒューマン・ネットワークセンターの蔵書から

『喪男の社会学入門』千田有紀 カラスヤサトシ 著 講談社

格差社会や結婚問題など様々な論点を「社会学」を通して考える。マンガ家カラスヤサトシ氏と社会学者千田有紀氏による対談とマンガを組み合わせた異色の入門書。笑いの中にジェンダーや男女共同参画についてのエッセンスが詰まっている。男女問わず楽しめる1冊だ。



『増補新版「男女共同参画」が問いかけるもの』

現代日本社会とジェンダー・ポリテックス 伊藤公雄 著 インパクト出版会

男性中心に動いてきたこの社会の枠組みを「男女共同参画」はどう変えようとしているのか。複雑化・グローバル化する現代社会に根づくジェンダー構造、男女共同参画政策やジェンダー・フリーをめぐる各地で起きたバックラッシュを読み解く。初版から6年、追加・再編集された本書が多様な議論を整理する。



むさしのヒューマン・ネットワークセンターは、男女共同参画社会を実現するための推進拠点施設です
武蔵野市境2-10-27 武蔵野市政センター2階 tel: fax 0422(37)3410
E-mail mhnc@tokyo.email.ne.jp URL http://www.mhnc.jp/

『まなこ』の輪が 社会を変える力に！

向井一江 『まなこ』元編集長39〜46号

女性が被る不利益を解決に導く女性情報誌『まなこ』は平成3年2月に創刊された。初代市民編集長は小宮蓉子さん、続いて小池牧子さん、岩崎みどりさん、そして4代目は私に決まった。姑が特養に入所して介護も一段落、ライター稼業の再開を決めたころだった。さっそく3つの改革を試みた。①女性情報誌から男女平等情報誌へ、②企画にそったアンケート内容を内部資料にとどめず積極的に誌面へ反映させ、③編集委員に名刺を作り記事はすべて記名入りとした。男女共同参画社会基本法や都の条例が整備され、男性へのアプローチも重要と考えたからだ。自分の名刺を使うことでプロ意識をもっとほしい思いもあった。また記名記事にすることで書いた人のキャリアにつなげたい、私自身もそうやってライターの道を歩んできた。2年がたち、ジェンダーの基礎を学ぶ必要性を感じて大学に入り直し、バトンを編集委員だった森治美さんへ渡した。私にとって作る側から読み手になった『まなこ』、昨年2月で20周年を迎えることを知らせてくれたのは、森さんの後を継いだ作部径子さん。



『まなこ』 創刊20年



「節目の年ですから同窓会、やりましょうよ」と実行委員会を立ち上げた。まずは同窓生を探し、連絡のついた方だけでもいいから集まってみよう、そこに意義があると、同窓会を決定。『まなこ』生みの親である市の元部長中野陸奥子さん、当時誌面作りで一緒に悩み、勇気をくれた職員森安恵里子さんも駆けつけてくれた。11月26日(土)午後のひととき、本町3センター会議室には23人の同窓生が集まり、盛り上がり力を発揮できた嬉し。今後も男女共同参画社会の実現に向け、ゆるやかにつながりつづけていこう。

男女共同参画社会とは？

男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会(男女共同参画社会基本法第二条より)

Editors' Notes 編集 * 後記

参加するなら一から準備が必要な災害ボランティア。参加者への「間接的な支援」もあっても良いかと思いました。(小林美菜)

活動を起こしている人は皆、普段から問題意識をしっかりと持っているのだと感じた。私もアンテナを張っていきます。(詩水淳子)

震災から1年。取材を通して、できることは思いのほかあると実感。2012年は小さなことでもできることから始めよう！(関口直子)

今回の取材で「地域力」を感じることができました。何かを始めるきっかけは、意外とすぐそばにあるようです。(藤原理和)

◎ 綴じ込み返信はがきにて、ご意見や感想をお寄せくださいましてありがとうございます。
24年度も『まなこ』を引き続きご愛読ください。

* STAFF *

レポーター：井上紀子 植田裕子 近藤和恵 袴田さおり
馬場美江 伏見奈美
取材・編集：小林美菜 詩水淳子 関口直子 藤原理和
市男女共同参画担当職員
編集協力：栗原 毅
イラスト：きたもりちか
デザイン：上田ジュンコ
印刷：プリンティングイン株式会社

* * * * *

『まなこ』は市役所、市政センター、図書館、コミュニティセンター、駅、市内の医療機関、美美容院、大型店舗、金融機関、おふろ屋さんなど市内の約450か所に置いてあります。バックナンバーをご希望の方は、市民協働推進課男女共同参画担当まで。